

「話し合い活動」における意思決定場面のやりとりの分析

～子供はどのように主張し、他児と折り合いをつけるのか～

鎌田 ルリ子 正岡 里絵

「話し合い活動」における意思決定場面で子供がどのように自らの意見を主張し、他児の意見と折り合いをつけるのか、そのやりとりを明らかにすることに取り組んだ。その結果、4歳児期と5歳児期の意思決定の方略の違いが明らかになった。4歳児期は、教師が意見を調整し意思決定に至っていること、また、言葉以外の行動方略も多く残っていることが分かった。一方、5歳児期は、言葉で理由を説明したり友達の説得に応じたりしながら子供同士で簡単な意思決定をすることが分かった。

【キーワード】 共同意思決定 「話し合い活動」 意思決定の方略

1 はじめに

子供たちは、友達と共に生活し、共に遊ぶ中で実に多くのことを共同で決めている。このような共同の意思決定場面では、当然、自分の考えを伝えるとともに他児の意見を聞き、意見の対立や意見の調整を経験する。順番や席順決め、遊びの選択やルール決め、鬼ごっこの鬼や役決めなど、実に多様な場面で多様な意思決定を行っている。

幼稚園における「話し合い活動」は、自然なコミュニケーションを通して、話し言葉を育てる活動である。教師は、子供が伝えてきた話題を取り上げながら子供の気持ち、場の状況や必然性などに即応して話を展開する。このような授業では意思決定を取り扱う場面も多く、まさしく子供が意見の対立や折り合いの付け方を実際のやりとりを通して学ぶことができる絶好の機会である。

また、「話し合い活動」における意思決定は、子供にとって必然的性が高く、結果が自分に大きく関与することから子供の関心は非常に高い。そのため、気持ちの揺れや葛藤が生じやすく、社会性の発達や意思決定の方略の課題が浮き彫りになる。

そこで、本研究は、「話し合い活動」における意思決定に視点を当て、そこで展開するやりとりを分析することで授業改善に役立つ知見を得たいと考える。

2 目的

「話し合い活動」における意思決定場面で、子供がどのように自らの意見を主張し、他児の意見と折り合いをつけるのか、そのやりとりを明らかにする。

3 研究の方法

(1) 対象学級

本校幼稚園4歳児2学級、それぞれの学級で実践

(2) 分析対象

平成26年4～7月（4歳児期）と平成27年4～7月（5歳児期）に実践した「話し合い活動」の意思決定場面の子供の反応と発言

(3) 分析方法

分析は、次の手続きで進める。

①逐次の授業記録を基にそれぞれの担任が意思決定場面を抽出し、書き出す。

②書き出した場面を意思決定の過程や条件の類似性により分類する。

③分類項目毎に活動や指導の系統性、代表的な言葉掛け、必要となる力などを分析する。

④4歳児期と5歳児期に見られる意思決定の方略の特徴を明らかにする。

4 結果と考察

(1) 共同の意思決定とは

それぞれの担任が、4歳児の4月～7月、5歳児の4月～7月の授業記録を基に意思決定場面を抽出した。本研究で扱う意思決定は、「選択肢の中からやりとりを通した選び出し」、「全員にかかわる結論を導き出す過程」とする。したがって、抽出する場面は、子供同士のかかわりで導きだされる共同の意思決定に特定した。

抽出した内容は、「どれが欲しいか」、「どっちがいいか」、「折り紙は何色がいいのか」、「運動会で紅組か、白組か」、「サッカーのキーパーを誰がするか」、「並ぶ順番や席順はどうするか」、「劇で何の役をしたいか」、「当番の代わりを誰がするか」、「足りない土産をどう分配するか」など、多種多様であった。また、抽出した場面は5分程度の短い内容から40分程度の長い内容も含まれ一定ではなかった。

そこで、話し合いの過程に着目し、場面を5つに分類した。分類項目は、「好みの物を選ぶ」、「代表者を決める」、「順番を決める」、「意見を絞り込む」、「遊びに関する様々な合意をする」である（表1）。

表1 意思決定の分類

場 面	内容例
好みの物を選ぶ。	複数の選択肢からそれぞれ自分の好きな色、柄、マーク、模様、菓子、土産、劇の役を選ぶ。
代表者を決める。	鬼ごっこの鬼を決める。 お遣い、お手伝い、当番代行サッカーのキーパーなどを決める。
順番を決める。	活動順、発表順、整列順を決める。 席順、テーブル位置を決める。
意見を絞り込む。	複数の選択肢から意見を絞り込む。
遊びに関する様々な合意をする。	遊びのルールを話し合う。 対戦相手を決める。 役（割）を決める。 グループ（チーム・組）を決める。

(2) 意思決定の分析

表1で示した分類表の項目毎に、代表的な教師の言葉掛け、必要と考えられる力を整理した。併せて、教師が、子供の年齢や言語力に応じて活動を展開させる視点も整理した（表2）。

①好みの物を選ぶ

「好みの物を選ぶ」は、複数の選択肢から好きな色、柄、マーク、お菓子、土産などを選ぶ活動である。この活動は、示された具体物や絵から一つを差

表2 代表的な言葉掛けと必要になる力

場 面	代表的な教師の言葉掛け	必要と考えられる力	展開を変化させる視点
好みの物を選ぶ	・「〇〇ちゃんは、どれにする？」 ・「〇〇君と〇〇君が、同じだ。どうしようかな。」	・具体物や絵を指さしや音声で伝達 ・意見が重なった時の譲り合い	・選択肢の数と人数 { ・過不足なし ・過不足あり } ・選択肢の好み { ・好条件のみ ・好条件外を含む }
代表者を決める。	・「鬼をやりたい人？」 →「はい／やらない」 ・誰にお願いしようかな？ ・どうやって決めようか？ ・次は、〇〇ちゃんね。	・やりたいか、やりたくないかの意思表示 ・じゃんけんの勝敗、くじの理解 ・活動内容やルールの理解 ・自己抑制力、予測、見通し ・仲間意識	・その後交代 { ・直後に交代 ・明日、数日後に交代 ・交代なし } ・規則性 { ・ある ・なし }
順番を決める。	・誰が最初にする？ ・順番はどうしようか？ ・くじで決めようか。	・順番の理解 ・待つ態度、自己抑制力 ・じゃんけんによる勝敗の理解	・当番が先頭 ・早く来た順番 ・生まれた順番・（誕生日）の順番 ・背の高い（低い）順番 ・呼ばれた順番 など
意見を絞り込む。	・どっち、どれする？ ・どうする？ ・何を作る？ ・何の劇をする？	・自分の考えを主張 ・他者意見の理解と受け入れ ・仲間意識 ・中間的な意見	・全員が発言しなくてもよい ・「分からない」でもよい ・全員が必ず発言 ・どれも嫌 ・どれでもいい
遊びに関する様々な合意をする。	・2つの組に分かれよう。 ・ルールはどうする。	・対戦相手やグループを効率的に決めるスキルの習得 ・遊びのルールの理解 ・役割交代の理解	

4 「話し合い活動」における意思決定場面のやりとりの分析

し示すなどして意思表示をする。そのため、早い時期から可能な活動である。

主張が重なった時の子供の言い分の引き出し方、譲り合いへの導き方が展開の要となる。

授業展開を工夫する視点には、数に過不足がなく全員がもらえる条件、選択肢の数と人数が一致しない条件がある。また、すべての選択肢が好みの物である条件、嫌な物が含まれる条件なども想定され、年齢に応じた展開が可能になる。

②代表者を決める

「代表者を決める」は、鬼ごっこの鬼、お遣い、当番代行、サッカーのキーパー、リレーの選手など、ある役割を特定の子供に決める話し合いである。「やりたい／やりたくない」の意思表示が前提になる。

自己中心性や自己顕示欲が強い時期には、丁寧なやりとりが必要になるが、このようなやりとりを通して、子供は、状況理解や他者理解、自らの気持ちを調整することを学ぶ。

やりとりを通して代表者を決める一方、じゃんけんやくじなどの遊びスキルを用いて簡単に決着を付ける場合もある。じゃんけんの勝敗を渋々受け入れる経験を重ねながら、子供たちには、じゃんけんなどの偶然性に従うルールが自然と根付いていく。

代表者を決める活動の中でも、リレーの選手やアンカーなど、学級の代表者を選ぶ場面は特別である。この場面は、学級としての仲間意識、選ばれた子供には充足感や自負心が育つ絶好の活動である。

③順番を決める

集団生活する中で、「順番を決める」意思決定場面は必ず生じる。成長の過程で、「ぼくが先」、「ぼくが一番」と先着を争う時期があるが、それも友達とのかかわり合い中で徐々に鎮まる。

例えば、4歳児期では、順番を決める際には随所で教師の仲立ちが必要になる。教師は、一人一人の言い分を聞きながらもある程度状況に応じた順番に導くことになる。また、この時期から「当番だから」、「生まれた順番」、「背の順」など、様々な順番を経験させておくことが重要である。

5歳児期になると、子供が互いに自分の言い分を言い合うがいざこざには発展せず、しっくりおさまるようになる。

④意見を絞り込む

この項目は、「どこで遊ぶ」、「何をして遊ぶ」、「どの本がいい」など、いくつかの選択肢からやりとりを通して意見を絞り込む活動である。

自分の思いを言葉で伝えること、友達の気持ちを察することが可能になる5歳児では、「ぼくがやってもし？」、「どっちにする？」、「どれがいい？」など、たわいもない会話にも相手の気持ちを尊重したり、ささいな決め事が生じたりする。

また、この項目には、「クリスマス会の出し物を何にするか？」、「文化祭の共同制作で何を作るか？」など、学級全体にかかわる重要な意思決定も含まれる。このような重要な決定事項は、子供のモチベーションが高く、多様な意見が飛び交う活発な話し合いになる。

⑤遊びに関する様々な合意をする

友達とかかわり合って遊ぶ時には、多かれ少なかれ仲良く遊ぶための合意事項が存在する。聴覚に障害のある幼児は、これらの合意事項を十分理解しないままに集団の動きに紛れてしまうことがある。そのため、教師は、子供がどの程度合意事項を理解しているかを把握し、適宜確認しながら遊びを見守る必要がある。

(3) 意思決定場面における子供の発言の分析

①子供の反応と発言の集約

前項より、多様な意思決定があるため、一括りで分析できないことが分かった。そこで、意思決定場面で見られた子供の反応や発言を5つの分類項目に分けて整理した。結果を表3に示す。

4歳児期と5歳児期の変容を明らかにするために、それぞれの時期に分けて発言を比較した。

表3 意思決定場面で見られた主な子供の反応や発言

	好きな物を選ぶ	代表者を決める	順番を決める	意見を絞り込む	遊びに関する合意をする
4歳児期	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の欲しい物を指さしや音声で伝える。 ・教師が子供の意見を調整する。 ・欲しい物が他児と重なると泣いたり怒ったりして大人に解決を委ねる。 <p>○必要な場面で教師がじゃんけんやくじ、あみだくじを提案する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各自「やりたい・やらない」を伝える。 ・「♪だれにしようかな」の歌に合わせて教師が決める。 ・教師に促されじゃんけんをする。 ・教師が「前、○○君がやったから今日は○○君ね」と理由を説明して一人に決める。 ・思いがかなわない時に受け入れるのに時間が掛かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの子供が1番や先頭になりたがる。 ・席や順番に関連して頻繁にいざこざが起きる。 ・強引に体を入れて割り込む。 ・教師に促されて友達に「入れて」と頼む。 ・順番等には関心を示さず友達の意見に従う子供もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・選択肢がないと意見は出にくい、選択肢が示されると「○○をしたい」、「○○がいい」と自分の思いを言う。 ・教師から「○○でいい?」「○○をしようか」と誘導され、簡単に返事をする。 ・教師がある程度誘導しながら、意見を絞り込む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師がルールを提案する。 ・教師が仲介して対戦相手等を決める。 ・教師の言葉掛けで2人組、3人組になって手をつなぐ。 ・素早く手をつなぐ子供もいれば、つなされるのを待っている子供もいる。 ・「♪このゆびとまれ」(歌遊び)
5歳児期	<p>○自分の気持ちを伝えたり他児の希望を聞いたりしながら子供同士で調整をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欲しい物が重なったら自ら譲歩する。 <p>「わたしは、こっちにする。○○君どうぞ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達を代替物に誘導する。 <p>「男の子だからこれにしたら」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供がじゃんけんを提案する。 <p>「じゃんけんしよう」</p> <p>○リーダーが全員の合意を取り付ける。</p> <p>「わたしはこれ、○○ちゃんはこれ、○○ちゃんはこれでもいいよだって」</p> <p>○特定の物に固執せず、どの選択しでも受け入れるようになる。</p> <p>「どれでもいいよ」</p>	<p>○友達による言葉での説明、説得、批判を受けて譲歩する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独占している状況を説明し交代を促す。 <p>「○○君は、前もやった」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独占している状況を批判する。 <p>「いつも○○君ばかり」</p> <p>「だって、ずるいよ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の気持ちを代弁する。 <p>「○○君がやりたいんだって」</p> <p>○交代、順番、共同で取り組む等の約束を取り付ける。</p> <p>「次は、ぼくだよ」</p> <p>「終わったら交代ね」</p> <p>「一緒にやろう」</p> <p>○じゃんけんの勝敗に従う。</p> <p>○子供同士で「♪だれにしようかな」の歌で決める。</p> <p>○自分の思いがかなわなくても直ぐに受け入れる。</p>	<p>○言葉での説明や説得を受けて譲歩する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当番や先取り優位など、自分の意見の正当性を主張する。 <p>・「当番だからぼくが一番だよ」</p> <p>「早かったから」</p> <p>「先生を見ていたから」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約束を取り付ける。 <p>・「来週は・・・だよ」、「帰りはぼくが1番ね」</p> <p>○友達から言われると受け入れて場所を譲る。</p> <p>○「入れて」、「いいよ」の自然なやりとりが成立する。</p> <p>○順番等に関連した小競り合いは日常的に生じるが長引かず自然に終結する。また、徐々に順番にこだわらない。</p>	<p>○ある案が出されると、それを手がかりに自分たちなりに別の案を考え出す。</p> <p>○異なる考えや意見に対して、「あのさ〜」「でも」「このまは〜」「だから」などの接続詞等を使って、自分の考えを伝える。</p> <p>○リーダーの意見が強くなり、従ったり同調したりする場合もある。友達の発言に影響をされやすくなる。</p> <p>○「しょうがないから」「まっいいか」「○○君はわがまま言うから」と言いながら自分の気持ちを抑え、他の意見に従うこともある。</p> <p>○自分と同じ考えに「ぼくも○○君と一緒に」「いいね」「そうそう」など同調したり相づちをうったりする。</p> <p>○考えに対して、自分なりの理由が言える。</p> <p>○教師が多数決の合意を導入する。</p>	<p>○以前経験した遊びのルールを子供たちで適応する。</p> <p>「3回で終わり」、</p> <p>○交代のタイミングを決め、友達に知らせる。</p> <p>「捕まったら交代」</p> <p>「6になったら終わり」</p> <p>○希望を聞きながら自分たちで対戦相手を決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調整が付かないと大人の助けを求める。 ・意に添わなくても渋々従う。 <p>○好きな友達とペアになる。</p> <p>○チーム分けの方略を教師が提案する。</p> <p>○チームの名前などを決めて仲間意識を高める。</p> <p>・「じゃんけんに勝ったら○○、負けたら○○」</p> <p>・「くじで決めれば」</p> <p>・「○○君は、強いから負けるから嫌だ」</p> <p>・「うらおもて」、「グーとパー」など</p>

全体を通して次の変容が読み取れる。

- ・5歳児は、自分の思いを言葉で伝える場面が増えている。
- ・4歳児は、教師が意見の調整を行っているが、5歳児では自ら折り合いを付ける場面も見られる。

- ・4歳児では、思い通りにならない状況を受け入れるのに時間が掛かるが、5歳児では、抑制力が育ち、じゃんけんなどで決着がつくようになる。
- ・5歳児では、友達からの説明、説得を受けて自分の考えを変える場面がある。

6 「話し合い活動」における意思決定場面のやりとりの分析

(4) 4歳児期と5歳児期の意思決定に至る方略の違い

表3を基に、4歳児期と5歳児期に見られた特徴的な意思決定の方略を表4、5にまとめる。

表4 自分の思いを伝える方略

4歳児期	5歳児期
○簡単で分かりやすい方略 ・指さし ・具体物の選択 ・やりたい／やりたくない	○自分の気持ちを言葉で伝える。 ・理由を伝える。 ・相手を説得する。 ・相手の発言を批判する。 ・相手の発言に同調する。 ・相手の発言を受け入れ、譲歩する。
○言葉以外の行動方略 ・泣き・怒り等感情表現 ・強引に割り込む ・許可を得ずに奪う	・気持ちを調整する。 ・じゃんけんを提案する。

①自分の思いを伝える。

4歳児期は、指さしや具体物の選択、「やりたい／やりたくない」の2者択一の意味表明など、簡単で分かりやすい方略で自分の思いを伝えている。また、この時期は、自分の思いを泣きや怒りの感情で表現する、強引に友達に割り込む、許可を得ず物を奪うなど、言葉以外の行動方略も多く残っている。

5歳児期は、構文は未熟だが言葉で自分の思いや考えを伝えるようになる。自分の考えを言葉にするだけでなく、自分の思いを通すために「ぼくが当番だから」、「ぼくは先生を見ていたから」など自分の正当性を主張する発言も見られる。また、相手が独占している状況を批判し交代を促す発言もある。

②相手の発言を聞き、折り合いをつける。

「話し合い活動」における共同の意思決定では、自分の思いを伝えるだけではなく、相手の発言を聞き自分の発言と折り合いをつけることも重要である。

相手の発言を聞いて自分の考えを修正したり、時には約束を取り付けて潔く諦めたりすることもある。どうしても譲れない時には、最後まで我を通すこともある。このような歩み寄りや調整を可能にするものは社会性の育ちが基盤となる。

4歳児期には、言葉で伝えられず欲しい物が友達と重なると泣いて大人に助けをもらうことが多い。また、自分の思い通りにならない状況を受け入れる

のに時間を要すこともある。しかし、泣いている友達を見て、譲ったり慰めたりするなど、向社会的行動が見られるようになることから、自他のぶつかり合いの中で自分の要求を統制して他人の立場を理解することを学んでいる最中にあたると思われる。

5歳児期になると、希望が重なったら自分たちでどうにか譲歩し合うことが可能になる。時には涙をこらえて我慢する場面もあるが、慰められると「もう言わないで」、「分かっているから」と強がったり、照れくさがったりするようになる。

順番等に関する小競り合いは、完全には消えない。しかし小競り合いが生じても長引かずいつのまにか終結する。また、教師が指摘するより友達から「ずるい」と言われる方が動揺するらしく、友達の存在が大きいことが分かる。

そのほか、5歳児では、「まあ いいか」、「しょうがないから」など、自分の気持ちを抑制する発言をしたり、「どれでもいい」、「どっちでもいい」など、曖昧な答え方をしたりするようになる。

③意見が対立した時の調整について

子供なりにそれぞれの言い分があって対立するが、その時の調整役、調整のあり方もその時期で異なる。表5にまとめる。

表5 意見が対立した時の調整

4歳児期	5歳児期
・教師が両者の思いや気持ちを言語化する。 ・教師が子供同士のやりとりの仲立ちをする。 ・教師が誘導して合意を取り付ける。	・子供同士で調整しようとする。 ・子供が教師に助けを求める。 ・教師は、調整のモデルを示す。 ・リーダー的な子供が合意を取り付ける。

4歳児期は、多くの場面で両者の思いを言語化したり子供の会話の仲立ちをしたりして教師が意見の調整を行う。

5歳児期は、簡単な話題であれば子供同士で調整しようとする。解決に至らない場合に教師の助けを求めるようになる。教師は、調整のモデルを示して模倣させることも多い。また、リーダー的な子供が、子供間の合意を取り付けることも可能になる。

(5) 5歳児に見られる意思決定方略について

前述したように、5歳児期になると言語力の未熟さ、社会性の発達課題は見られつつも様々な方略を用いて意思決定に至っていることが分かった。

そこで、5歳児に見られる様々な意思決定の方略について、その効果を分析する。

①言葉を用いた方略

・「○○ちゃんは、前もやった」、「いつも○○君ばかり」など、友達が独占している状況を訴え、本人や周囲の友達に気付かせる。

・「当番だから」、「早かったから」など、当番や先取りなど自分の優位な立場を主張する。

・「来週は僕だよ」、「終わったら交代ね」、「次はぼくだよ」と、一端の相手の言い分を聞き入れながらも次の約束を取り付ける。

・友達の気持ちを代弁したり、穏やかな口調で譲るように説得したりする。

「男の子だからこれにしたら」

「○○君がやりたいんだって」

・「入れて」、「いいよ」など、ごく自然に交渉する。

・「ぼくがやりたい」と繰り返すだけでは、聞き入れてもらいにくい。

②言葉以外の方略

意思決定には、言葉で伝え合う以外にも偶発性を利用したり効率よく決着をつけたりするために、様々な方略が活用される。

具体的には、「じゃんけん、くじ、あみだくじ、多数決、全員一致」などが、決定に直接関与する方略である。また、「うらおもて、グーとパー」など、チーム分け等に関係する方略もある。

「だれにしようかな」、「このゆびとまれ」などの歌遊びは、円満解決のためには効果的な方略である。

このような言葉以外の意思決定の方略を年齢相応に習得し、必要に応じて活用できることが集団としての意思決定には必要である。

しかし、話の内容、場の状況によっては、くじやじゃんけんを用いず、お互いの気持ちを十分出し尽くしたうえで意思決定することが望ましい。特に、子供が強い思いをもっている場合は、やりとりを通

して他児に分かってもらう経験を重ねることが自己理解、他者理解に役立つと考える。

5 まとめと今後の課題

本研究は、「話し合い活動」における意思決定場面で、子供がどのように自らの意見を主張し、他児の意見と折り合いをつけるのか、そのやりとりを明らかにすることを目的に実践を振り返った。

研究を進める中で、決定事項や条件によって話し合いの過程が異なることが分かった。そこで、意思決定の分類化を試みた。その結果、子供の年齢や言語発達に応じた授業展開の視点を得ることができた。

また、子供の発言の分析結果から、言語力の未熟さはあるが5歳児になると様々な意思決定方略を用いて自分の思いを主張したり、折り合いを付けていたりしていることが分かった。その他4歳児で見られる自己主張や他児とのぶつかり合いは、他者理解につながる重要な経験であることも読み取れた。

今後の課題としては、次のことが考えられる。

今回の研究は、子供の発言の分析のみで教師のかかわりについては言及していない。そこで、今後、意思決定場面における教師のかかわりや意図に関する分析を加え、子供の分析と関連させながら考察することが求められる。

また、子供のかかわりが深まる5歳児の2学期以降の分析を加えることで、「話し合い活動」における意思決定の全体像を概観することができる。

表2の「遊びに関する様々な合意をする」項目は、遊びの性質上、意思決定が複雑になる。そのため十分に分析ができなかった。今後の課題にしたい。

併せて、今回の実践研究で得た知見を授業改善に役立てることも重要な課題の一つである。

〔参考文献〕

- 嶋波朋子・三好史・麻生武(2002) 幼児同士の共同意思決定における対話の構造 発達心理学研究 第13巻, 第2号, 158-167
- 平林秀美(2003) 子どものいざこざをめぐる一社会性の発達の視点からー 東京女子大学紀要論集 53(2), 89-103